修論要旨

ラームモーハン・ローイとサティー

高橋　克幸

ラームモーハン・ローイ（Rammohun Roy、1772-1833 以下ローイ）は、「近代インドの父」と呼ばれている。彼は、インド社会に西洋近代思想を持ち込んだ最初のインド人であり、19 世紀後半から活発になっていく、インドの社会宗教改革運動の基礎を創った人物である。また、彼が 1828 年 8 月に設立したブラフマ・サバー（Brahmo Sabha、現在の名称はブラフマ・サマージ Brahmo Samaj）は、現在も全インドに支部が存在し、その影響をうかがうことができる。ローイが社会宗教改革を推進していく中で、最も関心を持ったのは女性の慣習の問題である。イギリスは、インド人女性の置かれた位置を後進性の象徴としていた。サティーは、女性に対する差別的な慣習の代表であり、18 世紀後半、ベンガル地方の特に上位カーストの間で流行していた。この慣習は、夫の死に伴い妻が夫の火葬の薪の中に身を投じるというものであり、主にクシャトリアの間で行われていたとされるが、その起源は不明である。

本論文では、彼の論文や手紙などを再検討することによって、ローイの女性観を明らかにする。そのためイギリスの支配体制や、それによってインド人が受けた影響、または政府によるサティーへの規制をみることで、ローイが登場した当時の環境を明らかにする。次にローイの受けた様々な教育や西洋知識との接触から、近代的知識人へとなる過程を追っていくことで、サティーに反対する思想の基礎を明らかにする。そしてローイの書いた女性に関する論文をみることで、彼の女性観を明らかにする。最後にローイが実際に行った反サティー運動や、サティー禁止法が成立する過程を追う。そうすることで彼の理想と考える女性像を考察した。

1772 年、イギリス政府は、民事の分野においてヒンドゥー法を施行した。政府は宗教・慣習などに不干渉の政策を採っていたため、この法は、インド人パンディットの意見を基に作られたものであった。そのため、政府は、かれらが宗教的権威をもつという慣習を否定することができなかったのである。「貞淑な妻」を意味するサティーもそうした慣習の 1 つであった。寡婦は、『マヌ法典』において「清貧で禁欲的な生活」を送るべきであると述べられていた。

イギリス政府は、サティーを後進性の象徴として考えていたが、前述したように不干渉の立場をとっていた。しかし、ヘースティングス（Francis Rawdon Hastings 1754-1826）総督時、サティーに関する規定が施行された。しかし、この規定は抜け道が多く存在し、サティーの抑制に結びついたとは言いがたかった。

また、18 世紀末葉、資金運営に悩んでいた東インド会社は、1793 年にザミーンダーリー制を施行した。これにより没落した地主の土地は、競売にかけられ、それを他の有力な地主

が購入していったのである。この土地制度施行により、ベンガル管区の富が流動的となり、新たに中小の土地所有者層が生まれる一因となった。また、地主やその家族は、様々場面でイギリス人と接触するため、英語教育を受け、西洋への興味や経済的な理由から東インド会社の官吏として働くものが増えていった。こうして西洋思想に触れるインド人が増えていったのである。こうした社会背景の下、ローイは登場することになる。

ローイは、両親の援助を受け、一般的なヒンドゥー教徒とは異なり、様々な教育を受けた。また、彼の両親の宗教環境もそれぞれ異なり（父チャイタニヤ派、母シャークタ派)、互いに宗教の指導者的な家系に生きてきた。そのため、ローイは幼少期から様々な宗教の思想に触れる機会を持った。そのような環境で成長したからこそ彼は、様々な宗教の影響を受け入れることができ、すべての宗教の間に優劣がないとの思想に至ったのである。また、当時のヒンドゥー教徒では珍しくイスラーム思想の教育を受けた。インド各地で様々な思想を学んでいく過程で、ローイの思想の根幹となるブラフマンの唯一神信仰や古代聖典への回帰、偶像崇拝の否定などの考えを形成していったのである。

このような教育を受けた後、ローイは、英語を学んだ。そして西洋諸国がインドに抱いていた考えを知ったのである。イギリスの支配理由が、インドの荒廃した文化を救い、文明化を助けることであるとローイは知り、衝撃を受けたことであろう。また、ローイは、キリスト教の平等観や道徳観に深く影響を受け、自身が設立したアングロ・インディアン・スクール（Anglo-Indian School）で教えた。

ローイの宗教思想の集大成と呼べるブラフマ・サバーは、入門に際し、宗教や宗派を選ぶことはなかった。彼は、宗教、宗派間の違いは、表面的なものにすぎないと考えたためである。そして、宗派の結束を得るために、キリスト教やイスラム教で行われていた、集団による礼拝や、道徳的な西洋近代思想を受け入れ、バクティに基づくヒンドゥー教のあるべき道を示そうとしたのである。

このような影響の下、ローイは、サティーに関する論文を英語で発表していった。ベンガル語などで自身の考えを発表しても、サティーを支持する人々を説得することは困難であると考えたためである。そのため、彼は、政府の力による強制的な禁止が必要であると考え、ヨーロッパ人に正しいサティーの知識を伝えるために、英語の論文を出版していったのである。

彼は、論文の中で『マヌ法典』などの古代法典にしたがい、寡婦はサティーを行うべきでなく、「清貧で禁欲的」な生活を送るべきであり、不当に当時の寡婦の地位が貶められていることを繰り返し論じている。また、サティーが『マヌ法典』に矛盾する慣習であり、行われるべきでないと主張しながらも、一時的であるが天国へ行けると述べる。しかし、完全な解脱を求めずに、一時的な天国での生活を推奨することは、価値がないと論じている。ローイは完全な解脱を求めていたためである。彼は、『マヌ法典』などの権威を持つ法典の指示通りに女性が生きるべきだと考えていた。彼は、サティーが女性にとって悲惨な慣習と考えていたのでなく、『マヌ法典』に反する慣習であると考えていたのである。そうした女性の立場は、無知や偶像崇拝がもたらしたと考えた。彼は、偶像崇拝を否定する論文を女性問題の論文とは別に発表しているが、偶像崇拝の弊害の例として女性問題がしばしば用いられる。『マヌ法典』に従い、

女性は、男性の庇護の下に生活をし、男性に尽くすべきという考えをローイは受け継いだ。つまり、彼にとり、女性問題は自身の宗教観を発表していく恰好の場であったのである。

ローイの反サティー運動は、1811年に行われた義姉のサティーを機に反サティー運動を開始した。彼は、サティーが行われる現場に赴き、『マヌ法典』などの法典を引用し、寡婦を説得するという方法をとっていたが、当時、このした法典を理解するバラモンは少なかった。そのため、古代法典に基づいて説得する活動は有効でなかったといえる。個人の力の限界を感じたローイは、サティーに反対する英語の論文を発表していくことになる。サティー問題を解決するためには、政府を動かすことが最も有効であると考えたためである。彼は、論文を発表していき、サティーが宗教的権威をもたないものだと主張し、政府の認識を徐々に変えていくことになった。しかし、政府は、ヒンドゥー教徒の反発を恐れたため、サティー禁止法の草稿が議会で支持されてからも施行するまでに時間がかかった。1826年にサティーの完全な禁止とする法案が提出されたが、時期尚早として、その法案が施行されることはなかった。そして、遂に1829年、ベンティンク総督の時に、サティー禁止法案が施行された。その法の序文は以下のものである。

ヒンドゥー教徒の寡婦を生きながらにして焼くサティーの慣習は、人間性の観点から不快に感じる。それは、ヒンドゥー教徒の義務として存在しないものである。サティーはインド中の大多数の人々に支持されず、行われていなかったが、対照的に寡婦が清浄な生活を送ることや隠遁することは、好んで教えられていた。ヒンドゥー教徒自身に衝撃を与えている残虐な行動であり悪名高いその慣習は、ほとんどの場所で存在しなかったのである。今まで干渉や、妨害を受けたためそれを止めることができなかったことから、議会は、この悪習を禁止する必要性を強く感じた。そのため人間性というイギリスの社会秩序の最も重要な信念の１つからそれることなく、それに基づいた法令に違反せずに厳守することで、すべての階層の人々が宗教的慣習の遵守につながる以下の規則を確立すべきと考えた。〔Majumdar, 1941 : 139-140〕

この法では、ローイの主張と同様に、ヒンドゥー社会の寡婦は「清貧に禁欲的な生活」を行うべきこと、そしてサティーは権威あるものでない、ということが述べられている。政府の公の文書に彼の主張する寡婦に対する考えが記されたことで、そのサティー観が政府の公認を得たといえる。

以上のように、ローイの働きによって女性問題は表面化していった。彼の女性観は、『マヌ法典』に基づいており、繰り返し述べたように、寡婦に「清貧で禁欲的生活」をすることを強く求めている。西洋諸国は、サティーをキリスト教の平等観や道徳観に基づいて不当な慣習と判断した。すなわち西洋の主張する女性の解放とは、まったく違うものだったのである。しかし、たとえ自身の思想・宗教を広めるために女性問題を論じたとしても、彼の活動はサティー禁止法に大きく影響を与えた。そのため、近代インドの女性問題の先駆者として、彼の果たした業績は偉大なものであるといえる。

引用文献

Majumdar, J.K., Raja Rommohun Roy and Progressive Movements in India, Calcutta, Sadharan Brahmo Samaj, 1941